

て、「了也印第七卷初也」と記されてある。baṣṭadi といふのは「初まれり」の義であるから、思ふに第二 baṣṭadi ymu といふのは、第七卷初也と記さるゝのと同様に、「第二初也」の義であらう。之によつて考へると、001 を第一巻と稱し、002 を第四巻と稱するのは、漢譯實義疏の巻名であつて、この回鶻文の譯本に於ては、別に更に小さく巻を分けたもので、漢譯本の第一巻といふものゝ中には、回鶻譯本の第一巻と第二巻、前者の第四巻の中には、少くとも後者の第六巻と第七巻とを収めて居つたものと思はれる。

001^a は初めの一―三の三枚と、六―十一裏の六枚と、残りの十一枚裏―十五に至るまでの三部分に分つて見らるゝもので（四と五とは白紙、十六は蒙古文の奥書）、三者共に「今此以後說相應義」の漢文に始まつて、然もそれぞれ相異つた三篇を収めてある。俱舍論の中で特に相應の義を説いた所は、漢譯の第四巻に存するから、或は此の巻に應ずる釋の残りであらうか（第六項參看）。

001^b（寫眞Ⅲ參看）は下に譯出する所に依つて認められる如く、四種の梵福を説いた斷簡一枚の裏面であるが、これは漢譯俱舍論卷十八の中に説く所に相當するから、前掲三者の何れとも別の巻に屬するものであらねばならぬ。さうして此の一葉が、或巻の末尾であつたことは、終に善哉也（此の二字につきては後に述べる）と記し、更に其の次に法華經第三巻に見ゆる有名な偈文を附して居るによつても明かである。

念の爲に此等の殘卷に記さるゝ所を、漢譯俱舍論に對比して、その關係の箇所を示すと

（I） Ch. XIX, 001 は卷第一、分別界品第一之一の初めより、本頌「有漏名取蘊 亦說爲有諍 及苦集世間 見處三有等」に對する長行の「隨義別名」に至るまでの譯及び之に附したる釋の譯